

今年国民読書年。読書推進のためのさまざまな活動が行われる中、大きな注目を集めているのが、家で行う読書「うちどく(家読)」です。本号ではその「うちどく」について触れるとともに、文豪夏目漱石の文を例にとりながら、「読むこと」と「書くこと」の相関関係について辰濃先生に解説していただきました。

『うちどく』ってなんでしょう(上)

四年前、ある出版社で、たまたま友人の佐川二亮さんに会った。出版取次大手トーハンの元広報室長で、しかも「朝の読書」の仕掛け人ともいべき人物だ。

朝、授業前の十分か十五分か、好きな本を読むという、あの「朝の読書」運動は、約二十年前にはじまり、いまは小、中、高の約二万六千校で実施され、九六〇万人の児童生徒が参加しているという。

「最近『うちどく』をやっています」と佐川さんがいう。
「えっ、うちどく?」

「家読と書きます。家族で同じ本を読むとか、やり方はさまざまです。『朝読』はなんとか定着したので、今度は『家読』の運動です。むかし「朝読」を熱っぽく語っていた人が、今度は「家読」を語りはじめて、やむことがなかった。

今年の年賀状に「家読礼賛」の言葉があった。お願いして資料を届けていただいた。

なるほどすごい。「家読推進プロジェクト」という組織ができています。あちこちで「うちどく」のシンポジウムをやっている。日刊紙に家読を進める全面広告がでています。さすが、情熱の人佐川二亮だなと思った。

◎ 「読むこと」と「書くこと」は表裏一体のものだ。おおよっぱな言い方だが、読むことの好きな人は、いい文章を書く。

シナリオライターの向田邦子さんは、小学生のころ、父の本棚の『世界文学全集』を読み、漱石の『坊っちゃん』や『三四郎』を読んだ。その漱石も、子どものころから四書五経その他の漢籍に親しみ、漢学が大好きだった。同時に、長じては落語が好きで、よく寄席に通った。『漱石と落語』(水川隆夫)という題名の本が出版されるほど、漱石の小説には、落語の影響が顕著なのだ。

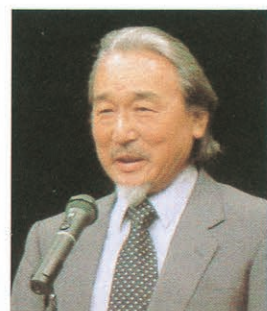
絵本の「読み聞かせ」という形の読書があるが、漱石にとって、落語は一種の読み聞かせだった。

せだった。

漢学と落語だけではない。漱石がロンドン留学中に熟読したのは英文学の数々だった。シェークスピアであり、ワーズワースであり、ステイブンスンだった。留学中、ひきこもり気味だった漱石はたくさん本を買って読み、読み、克明なノートをとった。「贖える書を片端より読み、…必要に逢うごとにノートを取れり」と漱石は書いている。英文学にどっぷりつかつた日々だった。

漱石の文章は、基本的には、三つの柱で成り立っている。一つは漢学の伝統であり、一つは落語を通じて得た日本の話し言葉のやわらかさであり、もう一つは英文学の教養と日本の知性のぶつかりあいによって生まれた独自の思想であろう。漱石の文学は、三本の異質な柱に支えられて花を開いた。

多くの異質の本を読むことで、私たちは「自分の文章」を鍛えることができる。今回は「うちどく」の実際の姿をお伝えしたい。



●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。